

～西原の森を歩いて～

先日、森川と棚原地区で西原町史産業編（林業）の植生調査を行いました。今回は沖縄国際大学非常勤講師の仲田栄二先生に調査にあたっていただきました。



植生調査中の仲田栄二先生（森川）

西原は近年、宅地化が進んでいます。一歩足を踏み入れるとまだまだ緑が残っていることに気がかされます。森川を流れる川には、琉大キャンパス内から流れるムン又ガールと、千原と上原の境界を流れるシジマガールが合流したガシチャガールがあります。（シジマガールとガシチャガールは共に宇地泊川の上流です。）流れも緩やかで水も澄んでおり、草木にも覆われていてとても静かです。西原の中でも最も自然形態が保たれている川だといえます。仲田先生のお話では、川を守っていくには周りの環境

も大切とのこと。例えば、川辺に木々があると、その葉っぱについている昆虫が川に落ちる↓昆虫を餌とする魚が繁殖↓その魚を食料とする陸上の小動物が集まる、といったサイクルが川を豊かで魅力的なものにするようです。また、森林伐採などによる赤土問題があるように、川は、森と海をつなぐ動脈的な役割を持っているそうです。

調査を畑や草むらに移すと、四季のはっきりしない沖縄でも、かわいい春を見つけることができそうです。ルリハコベやカタバミ（カタバミは一年を通して見られます）といった小さな花たちが、見る者の目を楽しませてくれます。また、普段よく見かけるオオバコは人や車輪に踏まれることで種子を運ぶそうです。このような小さな植物は、厳しい自然の中でたくましく、自分たちの種を残していくのです。森の周りを歩くと、カラ



森の乾燥を防ぐカラムシの茂み（棚原）

ムシ（別名：ヒージャーグサ、名前の通りヤギの好物。葉の裏に細かい毛があり、服などくっつくので、遊んだ経験のある方もいらっしやるのでは？）という植物がうっそうと茂っている場所があります。森は乾燥すると木々が枯れてしまうので、このような茂みは風による乾燥を防ぐという点で重要な役割を持っているそうです。森を構成する植物は何げなく生えているように見えても、それぞれ意味と役割を持ち、どの植物も山にとって欠くことのできない植物だということを実感しました。

今回の調査では、森の在り方や私たちの生活と自然との関わりなどを考えさせられました。緑や川のせせらぎの音の効用なのか、一日山に入っただけで、心が安らぐのを感じます。学生の頃から理科の苦手を私でしたが、身近にある自然を通して、関心を深めることができたいと思います。皆さんも身近な自然を体感してみたいいかがですか？暖かくなってきました、くれぐれもハブにはご注意ください！

●参考文献：西原町河川水質、底質、大気およびゴルフ場使用農薬調査業務報告書、「おおきみの自然」大宜味村教育委員会